

はじめに

いま、西暦2000年の歴史の節目を迎えようとしていますが、保健管理センターが4国立大学に初めて設置されたのは1966年ですから、本学保健管理センターも34年目を迎えることになります。この間、国民の疾病構造も大きく変化し、主要疾患が感染症から生活習慣病へと移り変わる一方、エイズや結核のような新興、再興感染症発生の問題が提起されるなど、感染症自体も複雑な局面を持ち続けています。それとともに、健康にあまり問題のない集団と考えられていた大学生にも、生活習慣病の危険因子をもった学生が多数存在することが分かってきました。また、精神面のケアが必要な学生はますます増加しており、今や、保健管理センターの果たす役割は益々重要になってきたと言えます。保健管理センターの設立当初の役割は疾病の早期発見と治療を主体とした健康管理でしたが、いま、様々な危険因子が指摘された学生に対して、薬で対応出来る部分のごくわずか、大部分は本人のライフスタイルの改変にかかっています。学生自身が生活習慣病の何たるかを理解し、積極的に対応出来るような、またあらゆる心身の健康問題について自己管理出来るような健康教育が絶対に必要です。私たちの役割は治療から教育へとその重点が移ってきたように思います。高齢化社会を迎えた日本の医療費増大が重大な問題となっていますが、来世紀これを解決出来るのも健康教育をおいてはないと考えます。長崎大学では、平成6年度、保健管理センターが全学生の健康教育に体育系の先生方と一緒に関わるシステムが出来ました。今後さらに内容を充実させるとともに、センター独自の健康教育を模索していきたいと考えています。全国の大学で組織の改変が進んでいる現在、保健管理センターが厚生補導のみならず、教育研究施設として位置づけられ、その教育機能が十分に発揮されることを来る2000年に期待してやみません。

平成11年12月

長崎大学保健管理センター

所長 石井伸子